03 レポート編

灸の工夫 見せてください！

温灸器から排煙設備まで 随所に工夫が光る温灸治療

profile: 渡邉（わたなべ） 元（はじめ）（(有) 赤坂治療院院長）

1948年、静岡県生まれ。1983年、呉竹鍼灸専門学校（現・呉竹鍼灸柔整専門学校）に入学。同年、先に同校に入学していた夫人が鍼灸マッサージ師の資格を取得し、赤坂治療院を開業。1985年、鍼灸マッサージ師の資格を取得。1992年、業務拡大により法人組織「(有) 赤坂治療院」に変更。2009年、治療院を自宅に移転。2017年、富士宮市技能功労者表彰を受賞。

photo：編集部

01 自ら設計、加工して理想の温灸器をつくる

(有) 赤坂治療院では現在、院長の渡邉元氏が自ら設計したオリジナルの温灸器を使用しているが、もともとは桜の木で製作した簡易的な温灸器だった。しかし、桜の木の温灸器は熱による膨張と収縮によって割れてしまったり、落下によって破損してしまうことがあり、多いときは1日5～6個も壊れていたという。これらを修理しながら使っていたとき、たまたま射出成形（合成樹脂を加工する技術）に詳しい患者から、「この器具なら射出成形でつくれるのではないか」と提案された。それから渡邉氏は業者の協力を得ながら、自身で図面を書き樹脂を取り寄せ加工するなどして試作品をつくり、改良を重ねて現在の形をつくり上げたという（**図1**、**図2**）。

そうして完成した温灸器は落としても壊れない耐衝撃性や耐熱性、洗剤で洗っても問題のない耐油性に優れているほか、皮膚に置いたときに不快にならない滑らかさや重みとなっている。また、温灸器には同院で艾を詰めた紙筒を使用する。

温灸器は紙筒を装着する部品Aと肌に接する部品Bとに分解することができる。部品Aは内側に

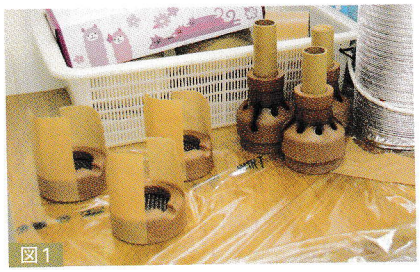

図1

温灸器。右側の部品Aに艾が詰まった紙筒を装着し、左側の部品Bの上面を治療部位に設置して部品Aを差し込み使用する

図2

部品Aと部品Bが合体した形